

チェーホフ作品における家族像（1886-1889）

The family image in Chekhov's works (1886-1889)

内田健介
UCHIDA Kensuke

要旨 本稿はチェーホフの1886年から1889年までの小説作品の中に描かれた家族関係を分析することで、チェーホフが抱いていた家族像を明らかにすることが目的である。本論文で扱うのは雑誌『新時代』に投稿をし始めた1886年からサハリン島調査以前1889年までの作品を分析の対象としている。この時期にチェーホフは新しく雑誌『新時代』に作品を掲載するようになった。『新時代』はこれまで作品を掲載していたユーモア雑誌とは違い、社会的な地位を有していた新聞であった。こうした雑誌に作品が掲載されるようになったチェーホフは、職業作家としての意識を持ち始めていたと考えられる。この時期の作品では家族を扱う作品では家族の死や家族と職業といったテーマの共通性も見られ、作品の創作に対する意識が高まっている。

はじめに

チェーホフは短編作品には署名にペンネームを用いて発表し、本名で作品を発表しようとしなかった¹⁾。彼はその理由を「自分はいつの日か文学からは離れ、死ぬまで自分が従事するのは医学であるから」²⁾、と説明している。しかしながら、そんなチェーホフもこれまでのユーモア雑誌とは趣の異なる『新時代』³⁾への作品は本名で発表するようになっている。この章では、スヴォーリン⁴⁾が編集長を務める『新時代』へ作品を投稿し始めた1886年からサハリン島へと向かう1889年までの作品を分析していく。この時期は、『新時代』への投稿に象徴されるように短編作家アントン・チェホントから作家アントン・チェーホフへと変化していく過程である。チェーホフは1888年2月25日に『北方報知』に掲載された『広野』でプーシキン賞を受賞し作家として成功を収めている。

1. 家族の死

1886年2月15日に『新時代』でのデビュー作『追善供養』が掲載された。このときチェー

¹⁾ 1883年10月29日に発表した『海で』では、アントン・チェーホフの署名で作品を発表している。他にも1883年12月3日の『分かってくれた!』、1884年12月5日の『安全マッチ』、1883年12月25日の『試験』に本名を用いている。

²⁾ 書簡1886年2月14日、スヴォーリン宛。

³⁾ 1868年から1917年までペテルブルクで発行された日刊紙。1876年からスヴォーリンが代表を務める。保守的傾向が強く、ドレフュス事件ではゾラを批判し、チェーホフとの対立の原因となった。

⁴⁾ A.C. スヴォーリン (1834-1912)。新聞社『新時代』の代表。社会評論家、小説家、劇作家でもあった。チェーホフとは共に海外旅行をするなど非常に親交が深かった。しかし、1899年のドレフュス事件に対する意見の対立によってチェーホフは彼と袂を分けている。

ホフはこれまで使っていたチェホンテや脾臓無き男のようなペンネームではなく、意識的に本名で発表している。

1886年に入ってからチューホフは家族を題材にした一連の作品を書いているが、その作品に共通して描かれているのが家族の死である。その家族の死を最初に扱った作品は、『新時代』へ『追善供養』を発表する2週間ほど前の1886年1月27日『ペテルブルク新聞』に発表された『ふさぎの虫』である。

この作品では息子を亡くした父親の心情が描かれている。辻馬車屋のイオーナは息子を一週間ほど前に病気で亡くし、その話を誰かに聞いてもらいたいのだが、馬車に乗せた客たちに話をしようとしても彼らは辻馬車の話すことに興味は無く、一様に話を聞いてはくれない。誰にも話を聞いてもらえないイオーナは客を拾うのをやめ、憂鬱なまま宿へと帰っていく。そして、そこで仲間の辻馬車屋に死んだ息子の話をしようとするが、仕事で疲れて眠っている彼らも話を聞いてはくれない。結局誰にも死んだ息子のことを話すことのできないイオーナは、明日の仕事のために自分の馬の世話へと向かう。そこで、馬に向かって自分の息子が死んでしまったことを話し始める。

このように、息子が死んでしまった父親の悲しみと、その息子の話を誰にも聞いてもらえない悲しみが折り重なった『ふさぎの虫』という題名にふさわしい作品である。作品の中でイオーナの息子の話を誰も聞いてくれないことは、息子の死に関心があるのは家族である彼以外にいないことを意味している。家族の死は家族の悲しみと他人の無関心によって比較されている。家族の死は関わる人間にとっては大きな出来事だが、他人にとっては全く関係の無い話なのである。作品の中でイオーナは話し相手を求めているが、その相手として彼が一番求めているのは恐らく死んでしまった息子である。彼が失ったのは息子であり、自分の話を聞いてくれる話し相手である。

さて話を『追善供養』に戻すと、この作品は娘を亡くした父親の物語である。父親の商人アンドレイが、娘マリアの供養をしようと教会を訪れたところから物語は始まる。アンドレイは娘の追善供養をしているあいだ、死んだ娘を思い浮かべる。かつて彼が召使として屋敷に奉公していたときに娘のマリアは生まれた。だが、彼は仕事の忙しさから娘をかまっていなかった。気が付いたときにはもう娘は成長しており、屋敷の人たちから読み書きやダンスを習っていた彼女は、彼らがモスクワへ移住するときに一緒に付いて行ってしまった。再び父親が娘と会ったのは、彼女が死ぬ3年前のことだった。商人になった父親アンドレイのもとに、突然モスクワから娘が尋ねてきたのである。娘マリアは美しく成長しており、彼女は上流階級の佇まいを備えていた。彼女はモスクワで女優になり成功したのである。しかしながら、女優という職業ゆえにタバコをふかし昼ごろまで眠っている娘を、厳格で信心深い父親は快く思わなかった。それゆえ、娘が話しかけようとしても、アンドレイは耳を傾けようとはしなかった。こうして親子の何年ぶりかの再会も、沈黙によって時間が過ぎていってしまう。その後、娘は帰る前日に一緒に散歩をしてくれるように頼む。洪々散歩に付き合うアンドレイだったが、散歩の途中で娘は突然泣き始める。父親は娘がなぜ泣いたのか分からず困惑するだけであった。教会の中で我に返ったアンドレイは娘の記憶を振り払うため十字を切り、神に祈り始める。そのとき彼が語った言葉は「娼婦マリアよ安らかに」⁵⁾ というものであった。

『ふさぎの虫』では息子を亡くした父親が描かれていたが、この『追善供養』では娘を

亡くした父親が描かれている。子どもを亡くしてしまった親の気持ちは、家族にしか分からない苦しみである。『ふさぎの虫』でも父親とその他の人々の息子の死に対する態度の違いが描かれていたが、この『追善供養』でも父親であるアンドレイと神父との間にはマリアの死に対する距離が描かれている。神父はアンドレイの娘が有名な女優であったということしか知らないが、父親は逆に女優でない娘しか知らない。神父はアンドレイに対してアンナが有名な女優であったと言うが、父親にとっては有名であってもなくても娘であることに違いはない。彼が娘を娼婦と呼んでしまうのも、親として彼女の生活が乱れていたのを知っていたためである。

さて、この作品では娘が幼いときから父親があまり娘とのコミュニケーションを取ってこなかった。それゆえ、久しぶりの再会をしても親子の間では会話が生まれず、沈黙のうちに時間が過ぎ去ってしまう。父親の思い出には死ぬ前の娘とのコミュニケーションが取れなかったことを悔いていると感じられる部分がある。「だが彼女は泣いて、泣いて泣き続けた。そして、胸一杯に貪るように呼吸していた。まるで残された呼吸が、もはや多くないことを感じているようであった…。(4:355)」という文章の表現から父親に会いに来た時点で娘が肺を病んでいたことが分かる。そして、この作品の父親アンドレイの視点で語られているため、この文章は彼の記憶の中の娘の描写である。それゆえ、娘が死んでしまってから娘がなぜ自分に会いに来たのか、そして帰り際に涙を流したのかに気がついたのである。しかし、彼は娘を冷たくあしらってしまった。もし娘が女優でなかったのなら、もっと温かく娘を受け入れてあげられたのかもしれないが彼にはできなかったのである。その原因を作った女優という卑しい職業を父親は憎んでいる。彼が娘をあえて娼婦と呼ぶ理由には、その女優という職業によって最後まで心を通い合うことができなかったことが原因である。

この『追善供養』の親子関係は、前回扱った『愚直』の親子関係とは対照的である⁵⁾。故郷に帰ってきた娘を受け入れられない『追善供養』の父親と、帰ってきた息子を温かく迎える『愚直』の父親の態度は全くの正反対であり、それぞれの作品の親に対する子どもの対応も逆になっている。『愚直』の息子は父親との会話にあまり興味をもっておらず、対する『追善供養』の娘は父親との会話を求めている。それゆえ、2つの作品では親子の関係が逆になっているのだが、どちらの親子もコミュニケーションが上手くいっていない点は共通している。

次に家族の死をテーマにした作品は、1886年5月31日に『新時代』へと掲載された『人生のわびしさ』である。この作品では一人娘を亡くしてしまった老夫婦の生活が描かれている。娘の死後、母親と父親は失ってしまったものを取り返すように生活を変化させていく。娘を亡くしてしまった母親のアンナは、それと同時に自分の生きる意味も失ってしまった。これから何を生きがいにするのか、とアンナが悩んでいると一つの転機が訪れる。料理中に火傷を負ったコックを自分の家で治療していて、彼女は医学に目覚めるのである。彼女は医師免許を持っていないのだが、屋敷を診療所として開放して自己流で病人

⁵⁾ アンドレイは娘が女優という職業に就いたため、卑しい職業ということで供養にまで娼婦という言葉を使い神父から叱られている。

⁶⁾ 参照：拙稿「チェーホフ作品における家族像(1883-1885)」『人文社会科学研究』第17号、千葉大学人文社会科学研究所、2008、147-163頁。

を治療していく。訪れる患者を救うことは彼女にとってかけがえのない喜びとなった。患者を救うことで彼女自身も娘を亡くした現実から救われていたのである。そんな新しい生活が始まると、かつて別れた軍人の夫アルカージイから手紙が送られてくる。娘は母親に隠れて父親と手紙のやり取りをしていたのである。その後、アンナは娘の代わりに別れた夫との手紙のやり取りを始める。年老いた夫も娘の死とともに生きる意味を失くしていた。手紙のやり取りは2年間続き、軍人だった夫は兵役を終えて妻のもとへと帰ってくる。こうして娘の死によって、再び一緒に住み始めることになった夫婦であったが、年を取った夫は口やかましくなっていた。彼には妻の医学のような、娘の死を埋めてくれる代わりのものが無かった。その代わりのものを探して教会に行ったり、周囲に住む人々と付き合いを始めたりするが長続きしなかった。そうしているうちに、アルカージイはアンナの治療を受けにやってくる農民たちに説教をするようになってしまう。説教が嫌になった農民たちは診療所に足を運ばなくなり、彼は妻の生きがいを奪ってしまった。しかし、この夫婦の関係を壊すかに見えた夫の行為は、逆に夫婦の距離を近づけるきっかけになった。2人は互いに娘を亡くしたという事実と向かい合っていなかった。アンナが生きがいとしていた医学も、結局のところ娘の死から逃れるためのものでしかなかった。そのことに気がついた夫婦は、一緒に何かをしようと2人で創作料理を作り始める。自分たちでアイデアを出して新しい料理を作り、一緒に食卓を囲み料理を批評するのである。だが、そうして見つけた夫婦の繋がりも長くは続かなかった。アルカージイが死んでしまうのである。再び家族を失ったアンナは「修道院に入ろう」とつぶやいて物語は終わる。

この『人生のわびしさ』では娘を亡くした両親のその後が描かれているが、年老いたアルカージイは死ぬ前日に妻に「私は、老後の一番自然な過ごし方は、やはり子どもであるべきだと思うよ…。お前は、どう思う？しかし、子どもがいないとしたら、人間は何か他のもので気を紛らわせなければなあ…。(5:177)⁷⁾」と語る。子どもを亡くして、それから残された家族はどうやって生きていくか。『ふさぎの虫』と『追善供養』では子どもを亡くした親の悲しみが描かれていたが、『人生のわびしさ』では子どもを亡くしてから的人生が描かれている。初めアンナは医学へと生きがいを求め、アルカージイは神に祈ることで娘の死を埋めようとした。しかし、チューホフは2人のこれらの行動を冷淡に「老いの悲しみの発作でしかない」と表現している。また、アンナの慈善的な医療活動もアルカージイを通して批判されている。確かにアンナは医者ではなく、真似事で治療していたにすぎない。彼女は農民たちのためでなく、自分の気を紛らわすために医療活動をしていただけである。彼らが娘の死と向き合ったあと、互いの結びつきが強くなっているのは、悲しい現実から目をそらしているだけでは何も変わらないというメッセージである。チューホフは作品に自分の主張を盛り込むことを避けて作品を創作していたが、この作品に含まれるメッセージ性からか『人生のわびしさ』は『新時代』に本名で発表された作品にもかかわらず、自選全集には入れられていない。

ここまで家族の死をテーマにした作品を見てきたが、なぜこの時期の家族関係を扱った作品では、死がテーマになっているのであろうか。これらの作品が発表された1886年は、モスクワでチフスが大発生した年であった。街にはチフス患者があふれ、医師であるチェー

⁷⁾ 以下原典からの引用はアカデミー版チューホフ30巻全集より。引用を（巻数：頁数）で示す。

ホフもチフス患者の治療に駆り出されていた。そして、彼がモスクワでチフスが流行している状況で患者の診察を行いながら短編執筆をしていたことが友人への手紙から分かる⁸⁾。この医療活動の中でチェーホフは家族を亡くした人々に数多く遭遇している。その経験から家族の死をテーマとした作品がこの時期に書かれたと考えられる。そして、このチフスという病魔はチェーホフの身内にも訪れる。

1887年の3月初旬、兄アレクサンドルからチフスにかかったと連絡があり、チェーホフは急いでペテルブルクへと向かった。しかし、いざペテルブルクの兄の家に着いてみると、兄はチフスになどかかっておらず、チフスにかかっていたのは彼の妻の方だった⁹⁾。チェーホフは彼女を手厚く看病してチフスから救っている。また、このときのペテルブルクもモスクワと同じくチフス患者であふれていた。チェーホフの才能を見出し激励の手紙を送ったグリゴローヴィチもペテルブルクの自宅で病に伏していた。このときの経験をもとに書かれた作品が短編『チフス』である。この作品は、1887年3月23日の『ペテルブルク新聞』に掲載されている。

この作品は主人公の兄がチフスにかかっていたことに気が付かず、ペテルブルクからモスクワの家へと帰ってきたことで始まる。長旅からようやく妹と伯母の待つ家へと辿り着いた兄は、チフスを発症し倒れてしまう。数日間苦しんだのち、どうにか体調を持ち直した兄は命が救われたことを喜ぶ。しかし、家の中からは妹の姿が消えていた。妹は兄のチフスがうつり、2日前に死んでしまったのである。そのことを伯母から聞かされた兄であったが、そのときの彼は妹が死んだ悲しみよりも自分が死ななかつた喜びのほうが強かった。しかし、一週間ほどしたある日、完治した兄は妹を失った悲しみに襲われ涙する。

この作品の兄から妹へとチフスが感染してしまい亡くなってしまうという展開には、チフスにかかっていると連絡があった兄は感染しておらず、彼の妻がチフスにかかっていた経験をアイデアにしていると考えられる。この作品でも妹が亡くなるという家族の死がテーマになっている。チェーホフは『チフス』を最後に家族の死をテーマにした作品を書いていない。これ以降にも『三年』や『谷間』のような家族の誰かが亡くなる物語は書かれているが、その物語のテーマは家族の死以外である。家族の死をテーマにした作品は、『ふさぎの虫』が発表された1886年1月から『チフス』が発表された1887年3月の間へと集中している。この家族の死が作品に描かれた時期と、モスクワとペテルブルクのチフスの大流行の時期が重なっていることは、この時期の社会状況がチェーホフの作品に強い影響を与えていたことを示している。

2. 家族関係における役割

チェーホフは作家であると同時に医師であったが、彼が担っている役割はそれだけではなかった。それは、家族における家長の役割である。家族との関係では、父パーヴェルと母エヴゲーニヤの息子として、アレクサンドルやニコライの弟として、イワン、ミハイル、マリアの兄としてアントン・チェーホフは位置していたが、この時期のチェーホフが果た

⁸⁾ 書簡 1886年2月28日、ビリピン宛。

⁹⁾ 書簡 1887年4月7-19日、キセリョーフ宛。アレクサンドルは憂鬱症から自分がチフスにかかったと勘違いして弟に手紙を出した。また、彼は妻がチフスにかかっていることに気が付いていなかった。

していた最も重要な役割は「家長」という役割であった。チューホフ家の中でアントンの手を借りずに生活をしていたのは、すぐ下の弟イワンだけであり、それ以外の家族は例外なく何らかの形でチューホフの手をわずらわせていた。2人の兄は女性や酒で問題を度々起こし、弟や妹の学費もアントンが払っていた。チューホフ家は、完全に三男アントンの収入で成り立っていたのである。

このようにチューホフが様々な役割を抱えていたように、人は複数の役割を抱えて生きている。時には役割によって損得をこうむる。チューホフが医師であったことが創作に大きな影響を与えていることに疑問を差し挟む余地がないように、役割同士は互いに関わり合っており、互いの役割の働きを促進することもあれば、一方の役割の邪魔になることもある。職業は辞めようと思えば辞めることができる役割であるが、先天的に与えられる家族の役割からは辞めることができない（もちろん家族から逃げることは可能だが、役割から逃げることはできない）。ここからは、この家族における役割と、職業や地位などの役割の関係性を扱った作品を分析していく。

このような役割をテーマとした作品は、家族の死をテーマにした作品と同じように1886年頃から現れ始める。例えば、家族の死を扱った『追善供養』だが、娘のマリアの女優という職業が父親のアンドレイとのコミュニケーションを阻害してしまっている。『愚直』の親子が金銭感覚の違いでコミュニケーションが上手くいかなかった点と比べると、職業という役割が家族関係に影響を及ぼすことが分かる。

役割の中での地位によって家族関係に影響を与え、その関係がこじれてしまう作品が『三等官』である。『新時代』に1886年5月6日に掲載されたこの作品は、題名にもあり通り三等官という非常に高い階級¹⁰⁾に影響されて、兄妹の関係が次第におかしくなっていく。この物語は、その地位によって翻弄される兄と妹の関係が、妹の子どもの視点から語られている。

ある日、母親の兄から屋敷で静養をしたいという手紙が送られてくる。三等官という重要な地位に就いている兄に粗相があってはならないと、屋敷の模様替えから子どもの私を含めた屋敷で働く人間まで大改造が行なわれる。このとき母親は兄が私を気に入れば、重要な職に就けてもらえるのではないかと期待も抱いていた。しかし、屋敷を訪れた兄は周りの苦労など気にもとめず贅沢三昧を繰り返し、屋敷の生活は無茶苦茶になってしまう。もはや、兄がいることに耐えられなくなった妹は、他の保養地へと離れてもらうために生活費を与えて、外国へと送り出して物語は終わる。

このように、重要な役職という役割が兄妹の関係に与える影響が描かれている。兄にとって妹は家族であり、妹の屋敷にはくつろぐためにやってきているのだが、妹にとっては兄という兄弟関係よりも三等官という重役に就いていることが重要な意味を持っている。そして、もはや重職に就いている兄と普通に暮らしている妹の生活水準には大きな差が生まれてしまっていた。兄にとっては日常的な生活も、妹にとっては非日常的で贅沢な生活である。これは『ワーニャ伯父さん』のセレブリャコフとソーニャの親子関係を思い起こさせる。セレブリャコフは大学教授という重要な役割に就き都会暮らしをしていたため贅沢な生活に慣れていて、その感覚のままソーニャの住む屋敷へと移り住んだために、屋敷の

¹⁰⁾ ロシアの官位は14の等級に分類され、5位以上は将官職。三等官は次官職である。

生活は無茶苦茶になってしまう。こうして、親子の關係に亀裂が入ってしまう点は『三等官』も一緒である。また、この作品では職業などの役割を得ていない子どもの視点を使って人間關係の変化を描写することで役割による影響がより鮮明にされている。

次に役割の家族關係への影響が書かれた作品は、作家の父親がいる家庭が描かれた『しいっ!』である。1886年11月15日の『断片』に掲載されたこの作品は、父親のクラスヌーヒンが作家という職業に就いているために、家族は彼の執筆を邪魔しないようにおとなしくしていなければならない。母親は子どもがお喋りをすると「しいっ!」と言って黙らせる。家の中での彼は作家という職業で家族の生活費を稼いでいるために王様同然なのである。しかし、編集部に行けば作家としての役割は、単なる雇われ人になってしまう。

家庭では作家という役割を持ち父親として家長の立場にあるクラスヌーヒンの存在は、神聖であり絶対的である。その父親の仕事を邪魔しないように、母親や子どもは彼に対して気を配らなければならない。このことは、家族を養うための職業という役割が、家族の行動を抑圧していることを示している。また、作家という一つの役割が家庭と職場という異なる場所では違う意味を持つことが描かれ、役割の複雑さを示している。

チェーホフも家族の居る家の中で作品を創作していたが、この作品のように静かな環境であることは滅多になかった。彼の書簡の中には、家族が出す騒音に苦しんでいることを書いたものがいくつか見受けられる¹¹⁾。『しいっ!』には「もし家族がいなかったら、こんな仕事放り出すのに…。(5:406)」という一文がある。この主人公の嘆きは、作者チェーホフ自身の嘆きを含んでいるのかもしれない。チェーホフは自分一人で家計を支えなければならないことに対する辛さを手紙の中で叔父に訴えている¹²⁾。

次に家族關係に役割の影響が現れた作品が1886年11月『新時代』に発表された『善良な人々』である。この作品には作家の兄と医師であった妹の兄妹關係が描かれている。作家と医者といえ、両方ともチェーホフの職業であった役割である。その彼が同時に持っていた2つの役割を、兄と妹に分割してどのような關係を物語の中に描いたのかを見ていきたい。

兄ウラジーミルは、毎週の新報へと文学作品の時評を載せている批評家である。一方、かつて医者だった妹ヴェーラは、結婚したのち家を離れたのだが、今は兄のもとに身を寄せて一緒に暮らしている。その理由は、彼女の夫は結婚後すぐに病気で死んでしまい、彼女も悲しみから後を追おうとモルヒネを飲み自殺を図ったが死にきれなかった。その後、奇跡的に助かった妹は、モスクワに住む兄のもとに身を寄せたのである。兄と妹は仲がよく、妹はいつも兄の隣に座って、仕事をする兄の姿を見つめていた。しかし、あるとき妹が無抵抗主義について兄に質問してから2人の關係はおかしなものになってしまう。無抵抗主義に対する意見が兄と妹で食い違ってしまったのである。兄は無抵抗主義に否定的な態度をとるが、肯定的な考えを持つ妹は納得がいかない。そして、兄は自分の考えに口を出す妹が疎ましくなり、妹も兄が信じられなくなり兄の文学批評が何の役にも立たないと非難を始める。その後、何度か關係の修復を試みるが、元のような仲の良い兄妹に戻ることはなかった。妹は兄の家を離れていき、妹の去った家で暮らしていた兄が肺炎で死んで

¹¹⁾ 書簡1883年8月21日または24日、レイキン宛。1888年4月26日、兄アレクサンドル宛。

¹²⁾ 書簡1885年1月31日、叔父ミトロファン宛。

しまったところで物語は終わる。

無抵抗主義に対する解釈を通して、兄と妹は別々の意見を持ったために互いに相容れなくなってしまう。物語の中での無抵抗主義に対するそれぞれの主張を見ると、兄の言い分にも妹の言い分にも正しい部分があるため決着は一向につかない。もし、家族以外の人間だったのならば議論を適当に切り上げることもできたであろうが、作家として働き家に一緒に住んでいる兄と妹ではそれができなかった。

この物語では無抵抗主義についての議論がなされているが、チューホフは選集へと収める際にこの議論の部分を大幅に削っている¹³⁾。この削減からは作品を発表した当時から無抵抗主義についてのチューホフの考えが変わったというよりも、その議論自体が作品の中心的テーマではないため削ったのだと考えられる。

最後の場面で、妹は兄のもとを去っていくのだが、そのとき兄は妹に対して、「彼にとって妹はもう家族ではなかった。（5：422）」と感じている。そしてそれは、それまで妹や彼女という表現をされていた妹ヴェーラが、「女医」（докторша）という職業で表現されていることでよりはっきりと示されている。

また、物語では兄の結末は書かれているが、妹のその後については書かれていない。しかし、この「女医」という表現に注目すれば、彼女が兄のもとを離れた後に医師として活動をしたと予想できる。それは、兄との議論をした中で行動しなければならないと言った彼女の主張に適った行動である。このとき、彼女は「妹」でも「元女医」でもなく、「女医」として生きていく決意をしていたのであろう。彼女は先天的に与えられた家族の役割である「妹」という状況から、医師という職業を持ち家から巣立っていつている。家族と別れて一人で生きていくことは困難な道であるが、明確な意思を持って前に進んでいく妹にとって、新しい生活はこれから始まるのである。精神的な病を抱えながらも自分の職業を持って立ち去っていく妹、批評家として働き死んでいく兄、この2人の関係は『かもめ』のニーナとトレプレフを思い起こさせる。女優として生きていくために湖から飛び立っていくニーナと、再び医師として生きていくヴェーラの姿は重なる。

この作品の中でのトルストイ主義に関する議論において、作家、医師の2つの職業を持っていたチューホフは、兄に文学者の役割と妹には医師の役割を与えて、正論同士を戦わせている。そして、物語の中の議論では一つの答えを導き出さずに終わっている。彼の無抵抗主義に対する考えは、この兄と妹の両方を合わせ持ったものであったように思われる。作家の仕事は問題を正しく提示することであって、決して答えを示したり導きだしたりすることではないとチューホフは考えていたが、そういった安易に答えを示さない姿勢がこの作品にも現れている。

ここまで作家を主人公にした物語を考察してきたが、1887年1月20日の『新時代』に掲載された『敵』は医師の父親を主人公にした作品である。また、この作品でも息子の死という前節で扱った家族の死が描かれている。

物語は、医師キリーロフの息子アンドレイがジフテリアで死んでしまうところから始まる。医者である父親は精一杯力を尽くしたにもかかわらず、愛する息子を死なせてしまい自分の無力さに呆然と立ち尽くし、母親も子どもの遺体の前で崩れるようにして倒れこん

¹³⁾ この作品は発表当時は『妹』という題名だったが、修正時に題名が『善良な人々』に改められている。

でいた。そんな悲しみに暮れるキリーロフ家に招かれざる客がやってくる。その突然の来訪者は医師としてのキリーロフを必要としている人物であった。彼は自分の妻が急病になったことを告げ、家まで往診に来てくれるように頼み込む。しかし、子どもを亡くしたばかりのキリーロフは診察などできるような精神的状況ではない。父親として悲しみに暮れている妻と亡くなった息子を、そのまま家の中に置いていくわけにはいかないのである。しかしながら、相手の男も自分の妻が急病とあって引き下がらない。そして、何度かの押し問答が続いたあと、キリーロフは医者という立場から病人の下へと向かう。

この物語では、医師という職業のために父親は息子の死を悲しむ時間すら奪われてしまっている。医師とは常に生死と関わる仕事であるが、キリーロフは息子を助けることができなかった。それゆえに、彼は父親としても医師としても息子の死によって深い傷を負っている。そしてそのとき皮肉にも、自らの家族が生死の境をさまよっている人物が彼のもとを訪れるのである。医師という立場にいる人物は死んでしまった家族よりも、死にかけている他人を気かけなければならない。死んでしまった人間を生き返らせられることはできないが、医師は病気で死の淵に立つ人間を救うことができるからである。職業である医師と家族の中での父親という2つの立場に板ばさみになるキリーロフを通して、医師という職業の辛さや困難さが表現されている。

次に職業という役割が作品に影響を与えているのが、1887年3月7日、『新時代』に掲載された『家で』である。この作品の主人公は検事を務める父親であり、彼と息子の会話が中心になっている。

検事を務めるブイコフスキイが家へと帰ると、留守中に7歳になる息子のセリョージャがタバコを吸っていたことを知る。セリョージャは父親の書斎からタバコを持ち出して吸ったのである。ここで父親のブイコフスキイは、息子にどうやってタバコを止めさせようか悩んでしまう。そもそも書斎にタバコが置いてあったように彼自身もタバコを吸い、決して喫煙を悪いものだとは考えていない。息子が部屋にやってくると、彼は検事という職に就いているためか、嘘をつかないようにと叱り、勝手に人のタバコを盗んではいけないと法律に絡めて説明するのだが、幼いセリョージャには全く話が通じない。そして、自分自身も子どもの頃にタバコを吸っており、親から体罰を受けてもタバコを隠れて吸い続けていたのである。結局ブイコフスキイは自分が悪いと思っていないことを、無理やりに息子に押し付けることができずに物語は終わる。

ブイコフスキイが息子のセリョージャにかける言葉には、検事という職に就いている父親の特徴が現れている。子どもを論理的に諭そうと努め、権利といった法律用語を用いたり、検事らしく息子が嘘をついたことを責めたりしている。そして、自分が正しいと思えないことを息子に無理やり教えることができないのだが、これは検事という嘘を嫌う職業の特徴でもある。ところが、裁判所では有効に働く理論や知識も、幼い息子には全く通用しない。「もしこの子が息子じゃなく自分の生徒か被告だったら、怖がったり自分の考えが乱れたりすることもなかったのに！（6：102-103）」と父親が語るように幼い子どもが相手では、検事として身につけた知識が役に立たないのである。

この作品では父親は息子のことを真剣に考え、子どもも父親を愛している。セリョージャがタバコを吸った理由も、恐らく父親の真似をしたかっただけなのであろう。これまでの作品で見られた、子どもが言うことを聞かなかったり、思い通りにならなかったりと

きに鞭を使うような親たちとは異なっている。「この子は自分なりの思考の流れを持っているんだ！（6：102）」とセリョージャが話を聞かないことに怒ったりせずに、子どもが独自の考えで行動をしていることを認めている。数多くある家族の登場する作品の中でも、この作品に描かれた親子の関係は愛情にあふれた関係である。

『脱走者』は、母親に連れられて病院へとやって来たパーシカが、病院から脱走しようとする物語である。彼は病院に入院することになったのだが、病院から母親のいる家へ帰ろうとして病室を飛び出してしまふ。この作品では『かき』と同じように幼いパーシカの視点で物語が進むが、子どもの世界が母親によって形作られていることが「自分の母親の受け答えから、パーシカは自分の名前がパーシカではなく、パーヴェル・ガラクトオノフであることや、7歳であること、読み書きができないこと、復活祭の頃から具合が悪かったこと、などを知った。（6：346）」という文章で表現されている。名前や年、体調さえも母親によって言われたことが、子どもにとっての真実になっている。

また、もう一つの子どもが登場する作品『少年たち』においても、母親に対する子どもの愛情が描かれている。この作品は、子どもたちが計画を立てて家出をするが、途中で捕まり家に連れ戻されるという話である。

ヴォロージャと友達の子エチエヴィーツィンは、家から飛び出してアメリカに行こうと旅行の計画を立てる。しかし、実際に計画を実行に移そうという段階でヴォロージャは母親が可哀想だと言って旅に出ることを躊躇する。結局は友達に説得されて一緒に家出をしようとするのだが、捕まって連れ戻されたときも母親に抱きついて泣きじゃくっている。

前回扱った子どもが登場する作品にも見られた特徴であったが、子どもたちは父親や母親に対して深い愛情を抱いて描かれている。大人たちから子どもへの対応が、専制的であったり融和的であったりと様々であるのに比べると、幼い子どもの親に対する態度は行為の違いや程度の差はあっても、その根本には親への愛情が存在している。

ここまで職業が家族関係に影響を与えている作品を考察してきたが、子どもという存在も役割の一種と考えられる。子どもであるがゆえに『家で』のセリョージャは父親のタバコを盗んでも犯罪に問われない。これは家族という関係が、他の関係に比べて特別であることを意味している。これまでの作品では家族という役割と職業という役割が合わせて描かれることはなかったが、この時期から一人の人間に複数の役割を担わせた作品が書かれるようになってきていることは、チャーホフの作家としての能力がより高まったことを意味している。

3.1 『重苦しい人々』

ここまで家族の死をテーマにした作品や家族関係と役割の関係をテーマにした作品を扱ってきたが、共通のテーマを持たない作品も1886年から1889年にかけては多い。そのため、ここからは一つ一つの作品を個別に見ていきたい。最初に扱う作品は、1886年10月7日の『新時代』に掲載された『重苦しい人種』である。この作品では、一つの家庭を舞台にして、専制的な父親に対する大学生の息子の葛藤が描かれている。

一家の父親シリャーエフは題名にあるように、家庭の中に非常に重苦しい空気を作り出す人物である。機嫌が悪くなると突発的に怒り出し、臆病な妻や娘たちは恐ろしさから泣き出してしまふ。そして、家族は彼の怒りが静まるまで黙って待つことしかできない。休

みの期間中に家へ帰っていた長男ピョートルが、大学のあるモスクワへと戻る前日に父親は癩癩を起こしてしまう。ピョートルがモスクワまで帰る旅費を貰おうとすると、父親は素直に切符代を渡す。この時点では彼は大人しかたが、続いて母親が息子のモスクワでの生活費も出して欲しいと頼んだとき、シリャーフは怒ってしまう。テーブルを叩き、全部持っていけと大声を張り上げながら財布を息子へと投げつける。息子は父親に落ち着いて横暴な行為をやめてくれるように頼むが、父親の機嫌は直ることなく、シリャーフは息子を役立たず呼ばわりして部屋から出て行ってしまふ。いつもならば父親が去った時点で騒ぎは収まるのだが、今度は息子のピョートルが父親と同じように怒り出してしまふ。彼は母親に向かって、父親と同じように大声でわめき散らして家から飛び出してしまふ。家を飛び出したピョートルは、モスクワまで歩いていくのも悪くはないと歩き続けながら、家族やこれからのことを考える。すると、彼の歩いている横を猛スピードで馬車が通り過ぎていく。通り過ぎざまに御者に怒鳴りつけられたピョートルは、とっさに相手に向かって微笑してしまふ。今自分が無意識のうちに笑ってしまったのはどうしてなのかと彼は考えるが、このとき馬車に乗っていた女性も自分の微笑に答え、微笑返してくれたことに気が付く。その女性はピョートルとは比べ物にならないくらい家庭での不幸に見舞われた人物であった。そんな境遇の彼女も笑い、家を飛び出した自分も笑うことができたという家族の問題を抱える人物同士に共通した出来事が、彼に不思議な影響を与え、家に帰って父親と話し合わなければと決心させる。父親の横暴な態度をやめさせることができるのは、息子である自分以外にいないとピョートルは思い立ったのである。家に引き返したピョートルは父親に向かって、家族に対して横暴な態度を取らないようにと諭そうとする。もちろん、父親は性格上そのようなことを息子から言われて怒ってしまうが、息子は怯まずに自分の主張を父親に言い続ける。薄々自分も悪いと感じている父親は息子の言葉に言い返せなくなり、部屋へと退散してしまふ。ピョートルがモスクワへと出発する日、彼が父親にさよならを告げると、父シリャーフは、息子に短い別れの言葉と金がテーブルの上に置いてある、と言って物語は終わる。

この『重苦しい人種』に登場する家族は、父親、母親、息子、娘、そして幼い3人の子どもで構成されており、専制的な父親に家庭が支配されている。これまでも『一家の父』のように専制的な父親が登場する作品はあったが、父と息子の衝突が描かれた作品はこの作品が最初である。

この作品の中で最初主人公のピョートルは父親に意見をするという考えは持って無かった。しかし、家を飛び出してから一人の女性とすれ違ったことで、自分が家族に対して何をすべきか考え始めている。すれ違った女性の家庭環境は、夫が賭け事に明け暮れ、子ども達も全員がまともに育っていない状況であった。そのような彼女の家庭と自分の家庭を思い、彼は「それぞれの家族には彼らの喜びと悲しみがあるが、それらはどんなに大きくても他人の目が見るのは難しいものである。まさにそれらは秘密なのだ。(5:328)」という結論を導き出している。これは、家庭の中で起きた問題はその中にいない人には見えてこない問題であることと、その問題を解決しようとするならば家族以外にはできないことを示している。この一文はチェーホフ自身の家族観が現れたものであろう。

3.2 『水車小屋で』と『父』

「水車小屋で」は1886年11月17日の『ペテルブルク新聞』に掲載された。この作品には、息子と母親の家族関係が描かれている。息子のアレクセイは裕福な商人である。

主人公アレクセイは、その横柄な態度から周辺の住民達からは嫌われた存在であった。彼とは誰も関わりたくはないのだが、一帯では粉を挽ける場所がアレクセイの水車小屋しかないために、人々は彼を頼らざるを得ない。そんな彼のもとに母親がアレクセイの兄の家族について頼み込みにやって来る。彼の兄は酒に溺れ働かず、家族は食べるのにも困るような状況なのである。しかし、アレクセイは母親から兄の話を聞かされても、何も答えようとせず助けようとはしない。

この『水車小屋で』は、裕福な暮らしをしているにもかかわらず、肉親を助けるために金を渡さないアレクセイを批判した作品のように思える。だが、この作品の本質は決してそこにはない。母親がなぜアレクセイを頼りにやって来ているのかといえば、それは当然のように思えるが、彼が家族だからである。母親も次のように息子アレクセイに「お前は私の実の子で、血を分けた子だよ…。(5:411)」と言う。この言葉には、家族とは助け合うべきものだという母親の家族観が潜んでいる。しかし、果たしてアレクセイが母親に金を渡すことは良いことなのであろうか。彼の兄の家族が苦勞している現状は解決すべき問題ではあるが、それは『重苦しい人々』に書かれているように、彼ら自身で解決しなければならない問題である。そのため、作者は決して母親の立場にだけ立ってアレクセイを責めてはいない。それは、作中での母親の表現方法に現れている。彼女はアレクセイからは「母親」(маменька)と呼ばれているが、地の文では一貫して「老婆」(старуха)という表現が用いられている。これは彼女が母親に値していないことを暗に表現していると考えられる。そして、最後の文章においてだけ彼女の表現方法が「母親」(мать)と表現されている部分がある。「粉挽きは金を見つめ、指の間で揉みしだき、のどを鳴らし真っ赤になって母に金を手渡した。(5:411)」という部分で初めて「老婆」ではなく「母親」という表現が用いられている。この場面の前で母親は息子に教会で貰ってきた菓子をあげようとするのだが、そのような母親の行為に対して息子は金を渡そうとするのである。このときには「母親」という言葉が使われている。ここから作者が親から子に対して金を求めることには否定的なのに対し、子から親に対して援助をすることには肯定的であることが伺える。

その親に対する子どもの援助が書かれているのが、次に扱う『父』である。この作品は1887年7月20日に『ペテルブルク新聞』に掲載された。物語には子どもに対して金の無心をする父親が登場している。彼は『重苦しい人種』に登場した父親のような威厳ある人物に比べ、息子へと金をせがみに行くような弱々しい父親として描かれている。

父親のムサトフは、息子ボリスの家へと酒代や生活費をせがみにやって来ている。そんな父親に対して息子は嫌がりもせず金を与え、靴のプレゼントまでしている。そして、今のような貧しい暮らしをやめて自分達と一緒に暮らさないか、と父親に勧める。しかし、そんな息子からの厚意も、父親は自分のような人間には穴倉暮らしが丁度いいと言って断ってしまう。彼にはボリス以外にも息子2人と娘が1人いるのだが、それぞれが独立して自分の道を歩み、そして同じように父の心配をしている。このムサトフが息子と一緒に住めない理由は、彼らの母親が亡くなったあとに再婚して妻と暮らしているためである。

そして、彼は再婚相手の尻に敷かれており、そのような姿を子どもたちに見せたくないがゆえに息子たちから離れて暮らしているのである。

こちらの作品でも父親の表現方法が「父親」と「老人」と使い分けられ、息子の対象となる時や、子どもたちを気遣う場面では「父親」という表現が用いられ、酒を飲んだり金の無心をしたりするときには「老人」という表現が使われている。また、父親が主語の文において、主語が省略されている文章も見受けられる。「3分ほどして彼は戻り、黙って父に10ルーブルを手渡した。すると、それを見もせず無造作にポケットへと突っ込み、言った。(6:268)」と、息子から金を貰ったときには父親という表現が使われているのに、主語が父親の文章では省略されてしまっている。これまでの作品でも、家族関係の間での金銭は悪いイメージであったが、『水車小屋で』と同じように親という表現が意図的に避けられている。

金銭的な家族の繋がりに否定的なチューホフであるが、家族関係そのものは重要だと考えていたことが、1887年12月7日の『ペテルブルク新聞』に掲載された『災厄』から感じられる。この作品では、個人の存在よりも、自分の所属する家族という存在が個人の存在の重要な部分であることが示されている。この作品の主人公アウデフは横領の罪で刑務所に投獄されてしまうのだが、裁判の最中も、有罪判決が下ったときも、彼には自分が罪人になったのだという実感はなかった。しかし、刑務所へと面会にやって来た妻と息子の変わり果てた姿を見て、自分が罪人になったのだと実感し涙を流している。自分の罪が、自分ひとりの運命だけでなく、家族の運命をも左右してしまったことでアウエデフはようやく自分の罪に気がつくのである。家族が罪を犯した場合、その組織に属する人たちにまで影響が及んでしまうことが、作品では描かれている。

3.3 『退屈な話』

本論で最後に扱う作品は、1889年10月27日『北方報知』¹⁴⁾に掲載された『退屈な話』である。62歳の名誉教授ニコライ・ステパーヌィチのわびしい晩年が描かれた作品である。

この作品では、教授ニコライと、彼の同僚の遺児カーチャが中心となって進む物語であるが、ここではニコライの家族関係に注目して物語を分析していく。彼は現在妻のワーリャと22歳になる娘リーザと暮らしている。またそれ以外にも離れて暮らしている息子が一人いる。だが、ニコライは自分の家族に対して不満を抱えながら毎日を過ごしている。彼以外は誰も働いていないため家庭の財政は苦しいのだが、娘や息子は贅沢な暮らしを続け、父親が苦勞していることに気付きもしない。彼は自分の置かれている状況を理解しようとし、しない家族を許せないのである。

また物語の中盤では娘リーザの結婚という問題が父親ニコライにのしかかる。娘のフィアンセらしき男性が家にやってきて一緒に食事を取るようになるのだが、ニコライは彼が気に入らない。妻は娘のフィアンセが金持ちであることを耳にして、結婚に賛成する。そして、父親に対して娘の結婚相手の領地に行き、彼の両親やどのような暮らしをしているのかを確認して欲しいと頼み込む。しかし、家族に不満を抱いている彼は娘のために遠出をしたり、相手の暮らしを確認したりといった家族のために行動することに対し

¹⁴⁾ 1885年から1898年までペテルブルクで発行された文学、学問、政治の月刊雑誌。

て気が進まない。彼にとって、自分のことを大事にしない家族と一緒に暮らしているのはもはや苦痛でしかないのである。

こうして家庭での居場所がないニコライは逃げるようにカーチャの住む屋敷へと向かい、彼女と過ごす時間に救いを求めてしまうのである。カーチャはニコライの家族を「まさかあれが家族ですか？つまらない人たち！（7：282）」と語る。生活を支えている父親のニコライを無下に扱う家族など、家族には値しないとカーチャは考えている。そして、ニコライの方も自分を特別に思ってくれるカーチャと過ごす時間が心地よく、家族よりもカーチャの方が大事になってしまう。彼にとって大事な家族というものは、過去の記憶の中にしか存在していない。「私は本当の家族と住んでいたのは遠い昔のことで、今は本物ではない妻の家で夕食に呼ばれ、本物でないリーザを見ているような感覚に襲われている。（7：278）」と、もはや今の家族を家族と感じておらず、最後には家族を全く信用しなくなってしまう。老齢からか体調が悪く時々発作が彼を襲うのだが、「どうしよう？家族を呼ぼうか？いやその必要はない。妻とリーザが部屋に入って何をしでかすか分からない。（7：301）」とあり、家族を呼んでは逆に殺されてしまうとすら考えるほど彼の家族に対する嫌悪は決定的になっている。

そして、家族に対する無関心さは娘リーザが父親に黙って結婚したということを知らされたときに最高潮を迎える。彼は娘が秘密裏に結婚したことよりも、それを聞いたときの自分の無関心さに驚いてしまう。もはや、彼の家族関係は冷え切ってしまっており、そしてその冷え切った関係にまで彼の心は何の反応もしなくなっていたのである。

この作品ではもう一人の主人公カーチャも家族関係を持っていた。彼女の父親は幼い頃に死んでしまい、父の同僚だったニコライに引き取られて3年の間一緒に暮らしていた。カーチャには本当の家族がないために、ニコライをまるで父親のように慕っている。しかし、ニコライのカーチャへの態度は家族に対するものと同じく冷めている。彼女は女優になる夢を叶えるために旅立つが、旅先で男に騙され、子どもまで産んだがその赤ん坊も死んでしまったというまるで『かもめ』のニーナのような人生を歩んでしまう。だが、ニコライはそのカーチャの境遇を淡々と考えるだけで、悲しみも怒りも彼の心には生じていない。それは物語の結末で決定的になる。

カーチャは父親代わりのニコライへ救いを求めるが、その悲痛な問いかけに対してもニコライは「分からない」としか答えられない。「あなたは私の父親、たった一人の親友じゃないですか！（7：309）」と自分をまるで父親のように思ってくれているカーチャに、ニコライは何の助言もできない。佐藤清郎はニコライが「カーチャから、娘以上に愛していた女性から拒否されるのである」¹⁵⁾と書いているが、拒否を示したのはニコライの方である。彼はカーチャにとっての父親になることは出来なかったのである。家族の中で父親としての役割を果たせなかったニコライが、突然カーチャの父親の役割を果たせるはずもない。学者として成功した彼も、父親として成功することはできなかった。これは、『ワーニャ伯父さん』のセレブリャコフに繋がる家族関係といえる。

¹⁵⁾ 佐藤清郎『チャーホフ芸術の世界』筑摩書房、1980、155頁。

結論

1886年から1889年にかけての家族関係を扱った作品を見てきたが、この時期の作品はこれまで扱った作品よりも人物の内面に対する描写がより詳しくなり、また作品で扱われるテーマも家族の死や家族関係における役割など、チェホフ時代の短編より重厚なものになっている。ここには『新時代』というこれまでのユーモア雑誌とは異なる投稿先や、字数制限などの制約から解き放たれてより長い文章を書けるようになり、より精細な人間関係を描けるようになったことが強く作用している。

家族を亡くして対象となる話し相手を失った人は、思い出の中でしか会話をする事ができない。こうした登場人物の心理描写が、これまで短編作品で表層的な登場人物の行爲を描いてきたことの多かったチェーホフの作品を変化させたのではないだろうか。本名で作品を発表するようになってから、チェーホフはより自分が作家であることを自覚したに違いないが、これまで目に見える外面的な描写に終始していた作品が、内面的な描写が加えられたことで深いものとなっていったのである。

そして、一人の人物に家族の役割と職業の役割を与えた作品が登場したことで、多層的な人物が作品には描かれるようになった。それにより、一人の人物のなかでの葛藤や衝突、家族関係と職業の関係など、一人の人間が持つ複雑な問題が描写されることになった。こうした、家族の死や役割という問題が作品の中で扱うことによって、チェーホフの人物の描写はより精緻になっている。また、この時期の作品には『重苦しい人種』や『人生のわびしさ』に見られるように、家族という関係に対しての提言的な表現が見られ、チェーホフが家族関係に対して何らかの意味を模索していたように感じられる。「芸術家は自分の作中の人物やその会話の裁判官になるべきではなく、その公平な証人であるべきです」¹⁶⁾と語ったチェーホフだが、作家という職業を意識して作品を創作するようになってからは家族関係を描いた作品で何らかの家族像を求めている。それゆえ、『家で』や『父』などのような家族という特殊な関係によってもたらされる温かさを表現した作品と、家族を失ったときの家族の悲しみを扱った『人生のわびしさ』や『敵』などの作品が描かれ、また初めて家族同士の衝突を扱った『善良な人々』や『重苦しい人種』など多くの異なった家族関係が描かれたのだと考えられる。

参考文献

- (1) Чехов А. П. Полное собрание сочинений и писем в 30-ти томах. Сочинения. М., Наука. 1974.
- (2) Летопись жизни и творчества А.П.Чехова 1860-1888. М., Наследие. 2000.
- (3) Чехов в воспоминаниях современников. М., Захаров. 2005.
- (4) 神西清、池田健太郎、原卓也訳『チェーホフ全集』中央公論社、1968。
- (5) アンリ・トロワイヤ（村上香住子訳）『チェーホフ伝』中央公論社、1992。
- (6) 池田健太郎『チェーホフの生活』中央公論社、1971。
- (7) 池田健太郎編『チェーホフの思い出』中央公論社、1969。
- (8) 井桁貞義監修『はじめて学ぶロシア文学史』ミネルヴァ書房、2003。
- (9) 浦雅春『チェーホフ』岩波新書、2004。
- (10) 角伸明「チェーホフの耳と子ども」（田中泰子編『カスチョール』第22号、2005）。

¹⁶⁾ 書簡 1888年5月3日、スヴォーリン宛。

- (11) 川端香男里『ロシア文学史』東京大学出版会、1986。
- (12) 久保英雄『歴史のなかのロシア文学』ミネルヴァ書房、2005。
- (13) *Громов М.П.* Чехов. М., Молодая гвардия. 1993.
- (14) 佐藤悦子『家族内コミュニケーション』勁草書房、1986。
- (15) 佐藤清郎『チャーホフ芸術の世界』筑摩書房、1980。
- (16) *Чехов М.П.* Вокруг Чехова. М., Московский рабочий. 1964.
- (17) *Дворникова Л.Я.* Новые псевдонимы А.П.Чехова?// Русская литература. Т. 3. СПб., Наука. 2005.
- (18) 藤本和貴夫・松原広志編著『ロシア近現代史—ピョートル大帝から現代まで—』ミネルヴァ書房、1999。
- (19) ベールドニコフ（三橋重男訳）『チャーホフの生涯・上下』東京図書、1978。
- (20) 牧原純『越境する作家チャーホフ』東洋書店、2004。
- (21) マリヤ・チャーホワ（牧原純訳）『兄・チャーホフの思い出』未来社、1968。
- (22) *Мирский М.Б.* Доктор Чехов. М., Наука. 2003.
- (23) *Леценко В.Ю.* Русская семья (11-19вв.). СПб., СПГУТД. 2004.
- (24) ロナルド・ヒングリー（川端香男里訳）『19世紀ロシアの作家と社会』中央公論社、1984。